

幼児の伝達行動におけるフランクの発達

—— 話し手-聞き手役割の認知について ——

高木 和子

歌丸 宏美

(山形大学)

ごく自然なコミュニケーションは、2人以上の間の複雑な相互作用であり、多くの異なるプロセスを含んでいる。何かを伝えようとする時には、聞き手の状況、知識、年齢などを考慮して言語化し、メッセージを送り、聞き手はこれを受け理解できた時に承認し、理解し得なかった時には、質問などのフィードバックを返す。そして、伝達者は修正したメッセージを送らなければならない。このようなことがお互いの理解が得られるまで続く。この過程は、大人同士の間ではほとんどうまくいき、大人と子どもなら、大人は子どもの未熟さを補助しながら進めるので、比較的伝達は成功する。しかし、子ども同士の間では、しばしば伝達失敗が起こっている。これは、子どもは「伝える」とはどのようなことなのかを十分理解していないため、適切な伝達行動のフランクがたてられないのではないかと考えられる。そこで、本研究においては、子どもの伝達能力を話し手と聞き手の相互作用の中で伝達過程をどのように把握しているかという、大きな意味でのフランクのあり方という面からとらえ、その実態と発達変化を明らかにすることを目的とし、2つの実験が行われた。

〔実験I〕

＜目的＞ リファレンシャルコミュニケーションを話し手と聞き手の相互作用過程をひき出す場として利用し、あいまいメッセージが送られた時の話し手、聞き手としての子どもの反応を分析する。そして、子どもの伝達能力の実態と発達変化を検討する。

＜方法＞ ①被験者：保育園児4歳児5歳児各10名
②実験材料：着せ替え人形セット；女人形と男人形の着せ替えセットがあり、各セットの内容は、子どもの絵と6種類の衣服である。各衣服は、色、模様、形などが異なる3次元2価で、8枚からなる。例：女人形用衣服…リボン、ブラウス、スカート、ベスト、くつ下、くつ ③手続き：被験者と実験者は、絵にのめられた人形に着せるものを8枚の中から1枚選ぶゲームも個別に行い、聞き手の実験者は次のF₁～F₄のフィードバックを与える。F₁：わかんないよ。F₂：それから、他に？ F₃：どこが違う？ F₄：もようは？ 子どもが聞き手の時は第1試行目に実験者は3次元の情報を含むメッセージを送る。役割を交替する時、教示者は子どもが

今度は聞き手であることを理解するまで説明する。そして、選ぶものがどれなのかわからない時は、相手に何でも質問していいことを教える。

＜結果と考察＞ ①最初のメッセージ(M1)に含まれる有効情報量：子どもの最初のメッセージをその中に含まれる有効情報量により平均得点を示したのが、表1である。このデータをもとに2(年齢差)×2(試行；1回目、2回目)の2要因の分散分析を行った結果、年齢差(F

年齢	試行	1回目	2回目	全体
5才		1.60	2.13	1.87
4才		0.93	1.37	1.15

表1. M1の平均点

〔1.18〕=10.67, $P<.01$)の主効果が有意となった。②各フィードバック水準に対する反応分析：実験者からのF₁～F₄レベルのフィードバックに対する反応を(e)有効情報を含む(i)リファレントの選択には無関係な情報を含む反応(r)最初のメッセージをくり返した反応(n)無反応の4つに分類した結果、各フィードバックに対する子どもの(e), (i), (r), (n)の反応の割合を表2に示す。年齢差をみるために χ^2 検定を行った結果、有意差が認められたのは、F₃レベルにおける全反応(e)+(i)+(r)の割合($\chi^2=9.33$, $P<.05$)および有効情報(e)の割合($\chi^2=8.15$, $P<.05$)であった。

F ₁		(e)	(i)	(r)	(n)
5才	6.5	10.9	2.2	80.4	
4才	3.7	0	3.7	90.6	

F ₂		(e)	(i)	(r)	(n)
5才	30.4	0	0	69.6	
4才	22.9	11.4	0	65.7	

F ₃		(e)	(i)	(r)	(n)
5才	50.0	6.3	6.3	37.4	
4才	11.1	8.3	0	80.6	

表2. F₁ ~ F₃水準の
フィードバックに対する反応

表2. F₁～F₃水準の

フィードバックに対する反応

③実験者からのあいまいメッセージに対する子どもの反応分析：子どもが聞き手の場合、実験者より1次元の情報を与えたあいまいメッセージを受けた時の子どもの反応を、次のように分類し、表3に示す。(e)有効反応；「それから？何色？」などと適切に情報を要求する。(i)無効反応；リファレントの選択に関係ないことを聞く。(n)無反応；何も聞かずリファレントを選ぶ

	(e)	(i)	(n)
5才	22.0	2.4	75.6
4才	12.2	9.8	78.0

表3. あいまいメッセージへの
反応割合

4歳と5歳の間に、発達の年齢傾向をみることはできなかった。

〔実験Ⅱ〕

＜目的＞ コミュニケーションゲームの相手として、実験Ⅰでの大人のかわりに指人形の犬を用い、子どもたちに、まだ幼いため能力の劣る犬であると紹介した場合の子どもの反応をとらえ、実験Ⅰの結果とどのような違いが生ずるかを検討する。

＜方法＞ ①被験者：保育園児4歳児5歳児各10名
②実験材料：着せ替え人形セット；実験Ⅰで用いたもの、犬の指人形；子どものゲームの相手として、実験者があやつる。
③手続き：子どもと実験者のあやつる犬を相手として、実験Ⅰとほぼ同じ手続きで行う。

＜結果と考察＞ 幼い犬を相手の実験Ⅱの結果、子どもたちは多くの言語反応を示し、積極的な話し手聞き手行動を取り、有能さを表した。この結果を実験Ⅰの結果と比較検討してみる。①子どもが「あいまいメッセージ」への相手からのフィードバックに対する反応の違い：実験Ⅰと実験Ⅱにおける年齢別の各反応の割合を図Ⅰに示す。

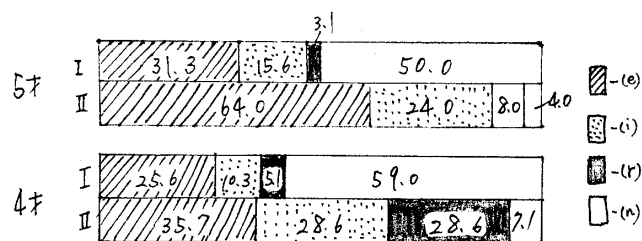


図1. 実験Ⅰ、Ⅱにおけるフィードバックへの反応の割合

実験Ⅰと実験Ⅱでの反応タイプの出現に差があるのを年齢別に χ^2 検定を行った結果、5歳児においては、(n)無反応($\chi^2=14.19$, $P<.001$)と(e)有効反応($\chi^2=6.07$, $P<.02$)に有意差が認められた。4歳児においては、(n)無反応($\chi^2=18.72$, $P<.001$)と(r)くり返し反応($\chi^2=7.06$, $P<.01$)に有意差が認められた。犬を相手として実験では、4歳、5歳ともに、犬からのフィードバックに対してほとんど言語反応を示し、積極的に相手にリファレントを伝えようとする態度がみられた。反応内容をみると、5歳児は、かなり適切に回答しており(64.0%)、話し手としての有能さを示した。4歳児は、有効反応を出し適切に回答したのは35.7%と低かったが、ほとんどの子は、何らかの言語反応を示したことから、質問に対して答えるというコミュニケーションの基本は身につけていることが明らかになった。②聞き手としてあいまいなメッセージを受けた

時の子どもの反応の違い：実験Ⅰで大人から送られたあいまいメッセージは、1次元の情報を欠くものであり、実験Ⅱでは2次元の情報も欠くものであったので、実験Ⅰと実験Ⅱの比較を可能にするため、ここでは、実験Ⅱにおいては、子どもが自分のフィードバックにより1つの情報を得た後、その次にどのような反応をしたかについてを分析対象としてみる。この場合、全く情報を得られなかった時には無反応とみなす。被験者の反応は、(e)有効反応；有効情報を得ることができると質問をする。(i)無効反応；有効情報を得ることができない反応。(n)無反応の3つに分類し、その割合を図2に示す。

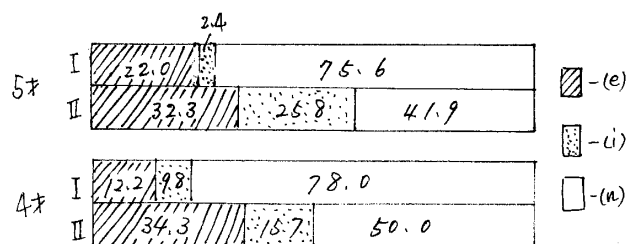


図2. 実験Ⅰ、Ⅱにおけるあいまいメッセージの反応割合

実験Ⅰと実験Ⅱでの各反応型の出現率に差があるのかどうか調べるため、年齢別に各反応について χ^2 検定を行った結果、5歳児においては、(n)無反応($\chi^2=8.42$, $P<.01$)と、(i)無効反応($\chi^2=8.81$, $P<.01$)に有意差がみられ、4歳児においては、(n)無反応($\chi^2=6.28$, $P<.05$)と、(e)有効反応($\chi^2=5.17$, $P<.05$)に有意差が認められた。実験Ⅰでは、4歳、5歳ともに言語反応を示した者は非常に少なく、聞き手としての能力はかなり低いものであると考えられた。ところが、実験Ⅱで犬からあいまいメッセージを受けた時は、4歳、5歳ともに、実験Ⅰよりも有意に多くの言語反応を示し、積極的に犬から情報を得ようとするかなり有能な聞き手としての能力を表した。反応内容をみると、実験Ⅱでは、4歳、5歳はほぼ同じ割合を示しており、実験Ⅰでは4歳は5歳に比べ、有効反応が少なかったことから、4歳、5歳の聞き手としての反応能力は、ほぼ類似しているが、4歳児の方が誰であるかによって影響されやすいと考えられた。

以上2つの実験から、4～5歳の子どもたちは、リファレントを比較する、メッセージのあいまい性を感じ取る、あいまい性の明確化のために質問をするなどのスキルは、ばらばらには獲得している。しかし、伝達場面における話し手や聞き手の役割を十分理解していないため、これらのスキルを有効に使うことができず、伝達行動がうまくできないうと考えられた。